

わたしとあの子とそれから

ゆかわ まこ

不4以元又cyo

里沙

わたしとあの子とそれから

気になるはがき

里沙とわたし

夕飯の時間

日曜日の公園

クワのおばあちゃん

おばあちゃんの部屋

おばあちゃんの気持ち

わたしの物語

これからのわたし

気になるはがき

十二月も半ばになり、街にはクリスマスを意識したイルミネーションやかざりつけが目立つようになった。

街路樹は、すっかり葉が落ちているところに色とりどりの豆電球を巻きつけられてちょっと息苦しそうにも見える。

週に一度通っているピアノのレッスンが終わり、わたしはいつものバス停でバスを待っていた。

小学校に入学したときに習い始めたピアノも、もう四年も習っていることになる。初めのうちはお母さんが送り迎えをしてくれていたけれど、二年生になってからは、学校からいったん家に帰り、そのあと一人でバスに乗って通っている。

五時半。冬の夕方は、暗い。

しばらくするとバスが来た。顔見知りの運転手さんに軽く会釈をして、バスの一番うしろの窓際の席に座った。

にぎやかなイルミネーションの街並みが過ぎて住宅街に入ると、バスの窓から見える明かりはほとんどなくなって、窓ガラスに自分の顔が映った。マフラーで鼻まで隠れた顔は、無表情だ。窓ガラスに映った自分の目をじっとのぞきこむ。

わたしはまたあのはがきのことを思い出していた。

昨日、学校から帰ると、里沙からのはがきが届いていたのだ。雪の積もった、真っ白い大きな山の写真の絵はがきだった。

そして、宛先のわたしの住所と名前の他にはがきに書かれていた文字はたったのこれだけ。

「実加へ。新しい家からはこの写真の山が見えます。元気ですか？私は元気です。里沙」

里沙とわたし

里沙は今年の夏休みに引っ越しをした。北の方の、遠くの町に。

里沙が引っ越して、転校してしまって、私は初めて里沙のいない二学期を過ごすことになった。

私には里沙以外にも友だちがたくさんいるし、里沙がいないということのをのぞけば学校での時間はそれまでと同じように流れていった。けどなんとなく何か足りないような、ぽっかりと穴のあいたような気持ちで毎日を過ごした。

いつも里沙との交換ノートに書いていたようなことを、書くあても話すあてもない。そのことが、里沙がいなくなってからの一番の変化だ。

わたしと里沙は小学校の入学式で出会った。

体育館の一番前の列で、初めて会う人たちに囲まれてガチガチに緊張していたわたし。

里沙とはとなりどうしの席だった。わたしのはいていたスカートが、わたしのいすと里沙のいすの間にはさまって、けどわたしは言い出せなくて。

そうしたら、里沙が自分で気づいて、いすから立ってスカートをとってくれたのだ。

「ありがとう」

その日からずっと、わたしと里沙は一番仲良しの友だちだった。

放課後どちらも習い事がない日は必ずといっていいほど一緒に遊んでいた。

里沙との交換ノートは、一年生のときから自然と始まったものだった。

休み時間に二人で一さつのがき帳にお絵かきをしていて、そのうちに、わたしがかいた絵に里沙が絵をつけ足して、またわたしがつけ足して……という具合に、かわりばんこに絵をかくことが二人の間で定番の遊びになった。

それがだんだんと、文字も書くようになっていった。初めは文字と絵でしりとり遊びなんかをしていた。

それが、自分の気づいたことや、感じたことなどを書いて相手に渡すようになった。家に持って帰って返事を書く。次の日にまた相手に渡す。という具合に交換するようになっていったのだ。

わたしは交換ノートに、例えばこんなことを書いていた。

「長い髪っていいなあ。もし私が髪が長くておさげのみつあみにしたら、肩のうしろに流すんじゃなくて、肩の前にもってきて、胸のところに髪があるようにしたいな」

これは、わたしも里沙も小さいころからずっと髪型がショートカットだったから書いたことなのだけれど、里沙は交換ノートの返事にこう書いてきた。

「わかるわかる！わたしもそう思ったことあるよ。もし髪が長かったら、わたしも、背中じゃなくて胸の前に髪を下ろすと思う！」

また、わたしが

「なおちゃんの布のペンケースにインクのしみができて、よごれちゃったーってがっかりしてたけど、わたしはなぜかそのしみがうらやましくて。自分のペンケースにわざとインクのしみを作ろうとしたんだけど、わざとやってもなんだかうまくいかなくて」

と書いたときは、里沙の返事はこうだった。

「なんとなく気持ちわかる。そういうインクのしみとか、持ち物のよごれって、物を大切に使うっていうか、よごれても使ってるっていうかんじがなんかいいんだよね」

こんなことをやりとりできるのは、里沙とだけなのだ。

人にわざわざ言うほどでもないような、自分がひそかに感じたことを、わたしはいつも里沙との交換ノー

トに書いていた。

里沙以外の友だちに話したら

「ふーん」

とか

「細かいこと気にしすぎー」

って流されてしまいそんなことでも、里沙は不思議なくらいわたしの気持ちに共感してくれて、なんでもわかり合えるような気がした。

そして里沙にとってのわたしも、そうに違いなかった。

交換ノートが一番うしろのページには、二人が大人になったら一緒にやってみたいことを思いついたら書くことになっていた。そこには

「日本中を旅行する」

「海外旅行をする（韓国）」

「二人でおしゃれなカフェをやる」

「結婚したらお互いの家族と一緒にバーベキューをする」

なんて、遠い遠い未来のことまでもが書かれていた。

それは何年後か、何十年後かわからないようなことだったけれど、里沙とだったらずっと友だちでいられるし、いつかは必ずそんな日がくるのだと思っていた。

ところが、里沙が引っ越して、その交換ノートもなくなってしまったのだ。今はわたしの家の本だなに買ったままになっている。

わたしはそれまでだったら交換ノートに書いていたことを、手紙に書いて里沙に送ることにした。

ふと感じた小さなこと。気づいたこと。授業中に思いついた、将来二人で行ってみたい場所、やってみたいこと。手紙は便せんで三枚にもなった。

里沙とは、引っ越したらたくさん手紙を書こうねって約束していたんだ。

だけど、二学期が始まって少したった十月の始めに書いたその手紙にはいくら待っても返事がこなくて、わたしはもう一度、十一月の終わりに手紙を出した。今度は四枚。

それでやっと昨日、里沙から初めて返事が届いたと思ったら、わたしが送った手紙二通ぶん、便せん七枚ぶんの返事のはずなのに、ぺらぺらのはがき一枚に

「元気ですか？私は元気です」

ってそれしか書いてないのだ。

そんなあ……。

夕飯の時間

お父さんの帰りが早い日は、お父さんとお母さん、妹のミクとわたしの四人で夕飯の食卓を囲む。家族みんながその日にあったことを報告する大切な時間。

里沙が引っ越してしまう前は、わたしの話には毎日毎日必ずとっていいほど里沙が登場した。

「今日、里沙がね」

というのがわたしのお決まりの話し始めだった。

今、思い出すと、何も考えなくたっていくらでも話し続けられるかんじだったなあ。

だけど最近は、話すことをがんばって探さないと何を話していいのかわからなくなってしまう。

学校の授業で何をやったか、なんて、理科の実験のことや図工でかいた絵のことなんかを話しても、すぐに話が終わってしまう。

わたしは、里沙からきたはがきのことを話した。お母さんは、

「ちゃんと、元気ですって書いてあるんだから。それでいいじゃないの」

と言う。さっぱりした性格のお母さんらしい。

「でも、わたしは二回も手紙出したんだよ」

と言うと、

「何でも見返りを求めない！」

なんて言って明るく笑いながら

「まあ、こりずにまたお手紙出したらいいじゃない」

だって。お母さんって楽道家だな。

お父さんは、

「里沙ちゃんも、いろいろ忙しいんだろう。家も学校も友だちも何もかも新しいんだから、慣れるまでは大変だよ」

と言う。

確かにそうだけど……とわたしは思う。さすが、お父さんは冷静だな。

「きっと落ち着いたらまた手紙をよこしてくるよ」

わたしは心のどこかで、転校してさびしくなった里沙がわたしのことを頼ってくると予想していたのだ。

里沙もわたしと同じように、わたしに話したいことや交換ノートに書きたいことがたくさんたまって、何枚も手紙を書いて送ってくるんじゃないかと思っていたのだ。それなのに。

どうして？

もやもやするなあ……。

日曜日の公園

今日は日曜日。いい天気だ。

お父さんとお母さんは用事があって出かけてしまって、妹のミクは家でテレビを見ている。わたしもさっきまで妹と一緒にテレビを見ていたけれど、つまらなくなって外に出てきた。冬の晴れた日は、思い切り息を吸いこむと体の中がひんやりして、鼻がちょっとツンとする。寒さが、なんとなくさびしい気分を運んでくる。

マフラーと、毛糸のぼうしと、手袋と、もこもこのコート。もやもやした気持ちも、寒さと同じように服装で解決できたらいいのになあ。

わたしはどこに行くという目的もなくとぼとぼと歩きながら、またまた里沙から届いたはがきのことを思い出していた。

「実加へ。新しい家からはこの写真の山が見えます。元気ですか？私は元気です。里沙」

短すぎて、暗記しちゃった。この文章。

里沙は、わたしとのいろんな約束、忘れちゃったのかな。里沙は、交換ノートが書けなくなってつまんなくないのかな。あっちでの新しい生活が忙しかったり楽しかったりして、わたしのことなんかすっかり忘れちゃったのかな。

またまたそんなふうに考えたら、胸がじわっとする。

人のいない、色の少ない、小さな公園。風が吹くとカサカサと乾いた音がする。

空だけがすっきりとした水色をしている。

ブランコに座って、地面に足をついたままゆらゆらと動かした。

この公園でも、里沙との思い出は数えきれないほどたくさんあった。

このブランコも、立ちこぎと座りこぎで何度も二人乗りをした。

そして今こうしてこのブランコに座っていると、公園の風景と一緒にたくさんの思い出を見渡しているみたいだ。

例えばあのどんぐりの木。よく二人で登ったな。夏に登ると、木の幹にアリがいて、虫が苦手な里沙は「虫、虫！」

って言って、途中で登るのをあきらめていたっけ。

それからあの砂場。家からプリン空き容器を持ってきて、砂をつめてはパカッとやって、小さなプリン型の山をいくつも作った。砂山はいつまでもとっておけないから、家に帰る時間になると砂山が惜しくて、何度も何度も振り返りながら帰ったっけ。

そうそう、アリのお城を作ろうっていう遊びをしたこともあった。

口に入れていたあめ玉を地面に落としちゃったとき、それをこの公園のベンチの下に寄せておいたら、次の日にアリの行列ができていた。それを見てわたしが提案したのだ。

二年生のときだっただろうか。

アリの好きな物をたくさん並べて、その周りを石や木の枝で囲って、アリが大喜びするようなアリのお城を作ろうと、二人で張り切って、お母さんにばれないように砂糖やあめを持ち出した。

アリにお城を作ってあげるなんてすごくわくわくして、草むらの中に完成させたけど、結局、二日たっても三日たっても、アリは住んでくれなかった。

わたしは今こうして思い出のつまった公園に来て、こんなにたくさんの思い出をはっきりと思い出すことができる。

だけど里沙は？

遠くの街に引っ越してしまって、こんなふうに昔のことを思い出すきっかけもないのではないだろうか。引っ越し先の新しい風景や新しい人に囲まれて、だんだんとそっちの方が日常になっていって。前のことは薄れていって。

そうやってどんどん時間が過ぎていったら、ついには引っ越す前のことなんか記憶から消えてしまうのではないだろうか。

木登りや砂場遊びやアリのお城のことだけじゃなく、わたしのことも全部、忘れちゃうんじゃないだろうか。

何度も何度も同じようなことを考えながらすっかりぼんやりしていたら、ずいぶん長い間ブランコをゆらしていたみたいだ。

いつの間にか、小さな二人の男の子が砂場遊びを始めている。

公園の入り口からこちらを見ている白髪のおばあさんがいる。

おばあさんは、しばらくすると公園の中に入って来た。

散歩中のおばあさんかな、と思って、顔を下に向け砂の地面を見つめていると、
「実加ちゃんじゃないの？」

という声。一瞬、名前を呼ばれたことに驚いて肩がびくっと震えた。

おばあさんが目の前に立っている。

「やっぱり実加ちゃん。まあ、しばらく会わないうちに大きくなったわね」

おばあさんの顔を見ると、よく知っている、でもすごく久しぶりに見る顔だった。

「クワのおばあちゃん？」

名前を思い出すのに数秒かかってしまった。

近所に一人で暮らしているおばあさんだ。

クワのおばあちゃん

わたしは小さいころよく「クワのおばあちゃん」の家で過ごしていた。

クワのおばあちゃんは、本当の名前を「桑島さん」という。わたしのおばあちゃん（お母さんのお母さん）の昔からの知り合いなのだ。

私が幼稚園に通っていたころは、パートに出ていたお母さんの代わりにクワのおばあちゃんが幼稚園に迎えに来てくれて、そのままお母さんが帰ってくるまでの時間をクワのおばあちゃんちで過ごした。

小学校に入ってからはお迎えはいらなくなったし、わたしは一人で留守番してもよかったのだけれど、ピアノのレッスンの日以外はクワのおばあちゃんちで過ごすことがそのまま習慣になっていた。

学校が終わって自分の家に帰ると、まず冷蔵庫を開ける。そこに、お母さんが、クワのおばあちゃん用にタッパーに入れておいたおかずが入っている。「おすそわけ」だ。カレーとか、煮物とか、ポテトサラダとか。わたしはそれを取ってすぐにクワのおばあちゃんちへ行く。それが、お母さんにとってもわたしにとってもおばあちゃんにとっても、当たり前のことになっていた。

クワのおばあちゃんちには、門を入った左側に「クワの木」がある。

その木になるクワの実を、夏になるとよく一緒に食べていた。だから、名前の「桑島」とそのクワの木のことをもって「クワのおばあちゃん」というのが呼び名になっていたのだ。

わたしの実のおばあちゃんは遠くに住んでいた。クワのおばあちゃんは一人暮らしだからいつでも必ずわたしの相手をしてくれて、わたしにとって本当のおばあちゃんのような存在だった。

小学校に入って里沙と仲良しになっていたわたしは、しばらくすると里沙のことも、クワのおばあちゃんちに連れて行くようになった。

わたしの習い事のピアノの日と、里沙の習い事のお習字の日以外は、学校が終わってから必ずといっていいほどクワのおばあちゃんちで三人で過ごした。

わたしに妹が生まれてお母さんはパートをやめたので、学校から帰ると家にはお母さんと妹がいたけれど、それでもこの習慣は続いた。

今思うと、ちょっと迷惑だったんじゃないだろうか。よその子が二人、しょっちゅう家にやってきて遊んでいるなんて。

でも思い出の中のおばあちゃんはいつもにこにこしていて、うれしそうにわたしたちの学校の話の話を聞いたり一緒に折り紙を折ったりしてくれていた。

おばあちゃんがいつも苦くて熱いお茶を出してくれて、わたしも里沙もそれが好きだった。

だけど、二年生の冬くらいからだんだんとクワのおばあちゃんちに行くことはなくなっていった。放課後も学校の校庭に他の友だちと集まってボール遊びなどをすることが多くなったのだ。

だから、おばあちゃんに会うのは二年ぶりくらいだった。

「ほんとにほんとに久しぶりねえ。実加ちゃん。元気だった？」

あんなに一緒に遊んでもらって本当のおばあちゃんのようにしていたはずのクワのおばあちゃんが、久しぶりすぎてなんだか恥ずかしいようなかんじがする。

「あ、はい、うん……」

はい、と言っていいのか、うん、と言っていいのか、どんな言葉づかいで話していたのか、それさえもよく思い出せなかった。

わたしはブランコに座ったまま、また地面を見つめていた。

「今日は里沙ちゃんと一緒じゃないのね」

戸惑っているわたしをよそに、おばあちゃんはその頃と全然変わらずに、久しぶりということをおぼえているみたいに話を続けている。

「里沙は、夏休みに引っ越したの」

わたしは顔を上げて、緊張したような気持ちで答えた。

「そうだったの、じゃあ、ずいぶんさびしいわね。あんなに仲良かったものね」

今まさに、里沙のことを思い出してぼんやりしていたところだ。

こんなに久しぶりに会ったおばあちゃんに

「ずいぶんさびしいわね」

と言われても、なんだか変な気持ちだった。

ずっと会っていなかったおばあちゃんにわたしの気持ちなんかわかるはずないんだ。

「ねえ、久しぶりにうちに来ない？」

おばあちゃんはにっこり笑った。

おばあちゃんの部屋

公園からクワのおばあちゃんちまで二人で歩いていると、何を話していいのかわからなくて、わたしはなんだかあせってしまった。どうしよう、家に着いてからだって、二人きりで何を話そう。

けどおばあちゃんの顔をちらっと見ると、おばあちゃんは何も言わずににこにこ笑っていて、わたしはほんの少しだけほっとした。

わたしの横を歩くおばあちゃんは、なんだか小さい。わたしの背があそこより大きくなったから、そんなふうを感じるのかもしれない。

おばあちゃんは腰がちょっと曲がっているし、背はそんなに高くない。だけど、おばあちゃんて、もっともっと、大きな大人だった気がする。あそこのおばあちゃんと今となりにいるおばあちゃんとはちょっと印象が違う。

二人ともだまっただましばらく歩くと、久しぶりの、クワのおばあちゃんの家に着いた。近所だけど、普段ここを通ることはない。

クワのおばあちゃんの家は何も変わっていなかった。門を入るとすぐ左側にあるクワの木はすっかり葉が落ちて、冬の姿になっている。

このクワの木に、夏になると濃いむらさき色の実がたくさんなる。晴れた暑い日に、おばあちゃんと里沙と三人でクワの実をとった。手や口の周りを真っ赤にしなが、木からとってそのまま食べたり、ざるにとっておいておばあちゃんがジャムを作ったりした。

わたしや里沙がここに来なくなってから、おばあちゃんは一人でクワの実を食べたりジャムを作ったりしていたのかな。

部屋の中に入ると、そこにも久しぶりに見る風景があった。

こたつ。背の低い食器だな。薬局で薬のおまけについてくる小さな人形が、たなの上にきれいに並べられている。古そうな時計。小さなテレビ。

おばあちゃんは居間のこたつの前にわたしを座らせると、「ちょっと待ってね」

と言ってすぐに熱いお茶を出してくれた。

わたしの前にお茶の入った湯のみをコトンと置くと、おばあちゃんはまた奥の部屋へ入って行く。

お茶の湯のみはわたし専用の物だ。ピンクの花柄。久しぶりに見たら、ちょっぴり子どもっぽいなと思った。

湯のみの内側は茶しぶの汚れがきれいにとってあってピカピカしていたけれど、外側の模様はところどころかすれている。ここに来るたびに、何度も何度も使っていた物なのだ。

最近、家ではお母さんと紅茶を飲むことが多いから、緑茶は久しぶりだ。この、にごった濃い緑色。

おばあちゃんのお茶はとても熱くて、しばらく置いておかないと飲めないほどだ。

もわもわとあがる湯気に顔を近づけくちびるをとがらせてちょっぴり口に含むと、苦い苦い味が口に広がって、不思議なかんじがした。なんだか一気におばあちゃんと里沙との時間がよみがえるみたい。

お茶を口に含んだまま、わたしは部屋をじっくり見回した。

ここに来るのは二年ぶりのはずだった。でも、この家に二年ぶりに来たというよりも、自分の家の、ずっと忘れていた部屋のドアを久しぶりに開けたような感覚。うまく言えないけれど。

おばあちゃんの気持ち

「実加ちゃんと里沙ちゃんがここに来たときよく遊んでたお絵かきの道具、それからのりやはさみ、みんなそのままにしてるのよ。ほら見て、なつかしいでしょう」

おばあちゃんが奥の部屋から出してきた大きなお菓子の空き缶のふたを開けると、それらが入っていた。表紙に「がようし」と書かれた色とりどりの画用紙の束。子ども用の小さなはさみ。のりと、十二色の色えんぴつ。いろんな大きさ、いろんな色や柄の折り紙。

おばあちゃんはその缶をこたつの上に置くと、わたしの向かい側に腰をおろした。

おばあちゃんも自分のお茶をすすりながら、ふうっとため息をつく。

「なつかしいわねえ。このこたつで、絵をかいたり、お茶を飲みながらおしゃべりしたりしたこと」

おばあちゃんの家はとても静かだ。どちらかが話さないと、しーん、という音が聞こえそうなくらい静かだ。時計の秒針の音がする。

「幼稚園のころは、幼稚園でけんかした話や、おうちで食べたご飯の話、お父さんお母さんの話。小学校に上がってからは、担任の先生の話や、学校で飼ってるうさぎの話。好きなテレビの話。毎日毎日違うお話が聞けて、ほんとに楽しかったのよ。それで、実加ちゃんたちがもっと大きくなったら、ここでどんな話をしようかしらってよく想像してたの。中学生にもなったら好きな男の子の話なんかも聞かせてもらえる日がくるんじゃないかってね」

おばあちゃんの手には折り紙で折られたつるがあった。わたしたちが小さいころに折った物を、おばあちゃんがこの缶に入れてとっておいたのだろう。折り目がとっても雑で、折り紙の裏の白い面がたくさんはみ出している。

「だけど、いつまでもこんなおばあちゃんと遊んでいたってつまらないものね、やっぱり同じ年ごろのお友だちと遊んだ方が楽しいものね」

わたしは、一瞬ちょっとだけ寂しそうな表情をしたおばあちゃんの気持ちが少しわかるような気がして、はっとした。あのはがきが来てから自分が里沙に対して考えていたことと似ていると思ったからだ。

いつか、大人になったら里沙と一緒に旅行に行こうとか、そんないろいろな楽しい想像が、いつの日か本当のことになるはずだった想像が、ある日突然、本当にならなくなってしまった、そんなさびしさ。

わたしはクワのおばあちゃんちに来ないようになってからおばあちゃんのことはずっかり忘れていたけれど、おばあちゃんはわたしたちが来なくなって、さびしい思いをしていたのかもしれない。遊びに来ていたこと、迷惑なんかじゃなくて、心から喜んでくれていたのかもしれない。

おばあちゃんは折りづるを指でなでながら話を続ける。

「だけど今日、こうやってお話できてとてもうれしいわ。こんなにお姉さんになった実加ちゃんに会えたんだもの」

折りづるからわたしの顔に視線を移して、おばあちゃんがまたにっこり、笑った。

「あ、そうだ、実加ちゃんが好きだったお菓子」

おばあちゃんは手をぼん、とたたいて立ちあがった。

おばあちゃんが木の器に紙ナプキンをしいてお菓子を持ってきてくれた。

どうぶつの形をした小さなクッキー。

「これ……」

これはわたしと里沙が好きだったお菓子で、ここに遊びに来るとおばあちゃんがいつも用意してくれていた。

だけど、わたしも里沙も二年くらいここには来ていなかったわけだし、今日わたしがここに来たのも突然のことなのに、どうしてこのクッキーがあるんだろう。

「実加ちゃんたちが来なくなってからも、お買い物に行くと、ついくせでこのクッキーを買ってしまうの。わたしもけっこう好きなのよ。このクッキー」

ひと口かじると、あまさが口に広がる。おばあちゃんちは、出てくるお茶とクッキー、何もかもが二年前のままなのだった。

「里沙ちゃんは、元気にしてるのかしらねえ」

クッキーを食べて思い出したのか、おばあちゃんがわたしの顔をのぞきこむように聞いてきた。

「里沙に、手紙を書いたんだけど」

わたしは、あまり思い出したくない、話したくない、そんな気もしたけれど、クワのおばあちゃんにも里沙のはがきのことを話そうと思った。

「わたしが二度も手紙を出したのに、里沙からきたのははがき一枚だけで。どうしてだろう。わたしのこと忘れちゃったのかな。でも、元気ですって書いてあったから。元気だと思う」

おばあちゃんのまゆげが一瞬下がって、悲しそうな顔になった。わたしはもやもやしてる気持ちを顔に出さないように話したつもりだったけれど、おばあちゃんにはわたしの気持ちが伝わったのかもしれない。

わたしがおばあちゃんのさびしい気持ちを少しわかったような気がしたのだから、おばあちゃんにわたしの気持ちがわかるのは当然のような気もする。

一度、窓の方に視線をうつしてからお茶をひと口飲んで、おばあちゃんはゆっくりと話し始めた。

「そう。それはちょっとがっかりだったわね。でもね、里沙ちゃんは実加ちゃんのこと、忘れたりしてないわよ。おばあちゃんにはわかる」

「どうして？どうしておばあちゃんにわかるの？」

「ずうっと、二人を見てたからね。実加ちゃんと里沙ちゃんはほんとに、二人を見ていたら、どちらが主人公かわからないみたいだったもの」

おばあちゃんってずうっとにここにこしてる。

「主人公って？どういうこと？」

わたしの物語

おばあちゃんは話を続けた。

「実加ちゃんが生まれてから、今までの人生と、これから何十年も生きていく人生。それは実加ちゃんだけの物語なのよ。その物語の中では、いつだって実加ちゃんが主人公。里沙ちゃんとは今まで一緒に過ごしてきた時間がとても長かったから、まるで物語の主人公が二人いるようだった。だけどやっぱり主人公というのは一人だけなのよ。実加ちゃんの物語の主人公は、実加ちゃんだけ。その物語の中で里沙ちゃんはとても重要な登場人物だけど、里沙ちゃんには里沙ちゃんの物語があるのよね。もちろん、里沙ちゃんの物語の中でも、実加ちゃんはとても重要な登場人物よ。ただ、今はちょっと離れ離れになってしまったということね」

わたしは、自分を主人公にしたお話が一冊の本になったところを想像してみた。

わたしがこの世に生まれてから今日までの物語。

生まれたばかりの赤ちゃんだったわたしは、きっと泣いてるだけで、一人では何もできなかつたろう。それがだんだん、ハイハイするようになってたり、おしゃべりができるようになってたり、食事や着替えを自分一人でできるようになってたり、字を書けるようになってたり。きっとそんなわたしの成長のそばには、お父さんやお母さんや、学校の先生や、クワのおばあちゃんが、にこにこ笑いながら登場するんだろうな。

そしてそんなわたしの物語に一番たくさん登場するのは、もちろん里沙だと思う。

だけど、お父さんやお母さんに聞いたら、わたしが赤ちゃんの頃のこととか、もっともっとわたしの知らない物語があるのかもしれない。

じゃあ、これからの、未来の物語はどうなんだろう。

里沙が引っ越しちゃうまでは、これからずっと大人になっても里沙が一番の登場人物で、これから起こるいろんなできごとは全部、里沙と一緒にはずだった。

だけどそれは違っていたみたい。わたしの思い過ぎだったみたい。勝手な想像だったみたい。

そのことはすごくつらい。受け入れたくない。だって、未来に思い描いていた楽しい物語が消えてしまったんだもの。

わたしは何も言わずに、両手の中にある苦いお茶の入った湯のみを見つめた。お茶はすっかり冷めてしまって、もう湯気は立っていなかった。

おばあちゃんもしばらく何か考えてるみたいにだまっていたけれど、やがて静かな声で話し始めた。

「私なんか実加ちゃんの何倍も長いこと生きてるから、私の物語には、それはそれはたくさんさんの登場人物がいるのよ」

おばあちゃんがわたしの何倍も生きてることは、わかる。おばあちゃんの物語にたくさんさんの登場人物がいることも、わかる。

だけど今のわたしは今のわたし。おばあちゃんはおばあちゃんだから、こんなふうに余裕でいられるんだ。

わたしはおばあちゃんの言ったことを素直に受け止めることができなかつた。それでもおばあちゃんは続けた。

「今はまだ出会ってもいない人が、これからの実加ちゃんの物語にはたくさん登場する。里沙ちゃんのように仲良しになれるお友だちに、これからまたたくさん出会うの。それに、里沙ちゃんがまた近くに帰ってきて、また毎日会うようになるかもしれない。何が起こるか、どんな人に出会うかなんてわからない。これ

からの実加ちゃんに、どんな物語が、どんな登場人物が待ち受けているのかしらね。楽しみにしましょう」

おばあちゃんは相変わらず笑顔で話している。

だけどわたしはやっぱりそんな気持ちにはなれなかった。おばあちゃんの言ってる意味はわかるけど。これから新しくできる友だちのことなんか想像もつかない。

「なんか……気が遠くなる」

わたしは精一杯の言葉で、正直な気持ちを言った。おばあちゃんは

「もちろん。それでいいのよ。実加ちゃんが読むどんな本よりも長い長い物語だもの」

と笑った。

これからのわたし

クワのおばあちゃんちを出ると、外はすっかり暗くなっていた。

家では、夕飯の準備がちょうどできてお父さんとお母さんと妹のミクがわたしの帰りを待っているころだろう。

クワのおばあちゃんに久しぶりに会ったこと、里沙に手紙書こうかな。でも、また返事がこなかったら落ち込むし、やめておこうかなあ……

わたしのもやもやは、消えない。

だけど、今日は夕飯を食べながら、クワのおばあちゃんに久しぶりに会ったことを家族に話そう。

久しぶりに家族に話したいことがたくさんあるようで、わたしは少しだけわくわくしていた。

「ただいま！」

——夕飯のあと、お母さんと二人で洗濯物をたたんでいると、お母さんが言った。

「ねえ、さっきの話の続きだけど、実加、また前のようにたまにクワのおばあちゃんちに行ったらいいじゃないの」

お母さんは家族みんなのくつしたを、わたしはタオルをたたんでいる。

「実加が小さかったころは、お母さんが作ったおかずを持って行くことと、おばあちゃんに遊んでもらうことだけだったけど、実加も大きくなったし、おばあちゃんのお手伝いをしたりして、恩返しができるんじゃないの？」

「恩返しなあ」

次の日曜日、わたしは午前中からクワのおばあちゃんちを訪ねた。

おばあちゃんは部屋に掃除機をかけていた。

「おばあちゃん、わたし、やるよ」

「まあまあ、どうして実加ちゃんが掃除機をかけてくれるの」

おばあちゃんは、おかしなものでも見たみたいな顔で笑っている。

「いいからいいから」

わたしの物語はまだ始まったばかり。わたしの物語はわたしのものはずなのに、思い通りにはいかない。

だけど、今こうして、クワのおばあちゃんちで掃除機をかけていることが、なんだかうれしくて楽しい。わたしの想像とは違っていても、うれしくて楽しいことはあるのかもしれない。

ずっと会っていなかったクワのおばあちゃんとまたこうして会うようになったり、これからもずっと会えると思っていた里沙が遠くに行ってしまうたり。それがわたしの物語。これからどんなことが起こるんだろう、これからどんな人と会おうだろう。それは、「楽しみ」とはちょっと違う、不思議なドキドキだ。

わたしが主人公の物語は、ずっとずっと続いてく。わたしと、わたし以外の世界とが、ずっとずっと続いてく。

わたしとあの子とそれから
<http://p.booklog.jp/book/77049>

著者：ゆかわ まこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lisshunn/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/77049>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/77049>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ